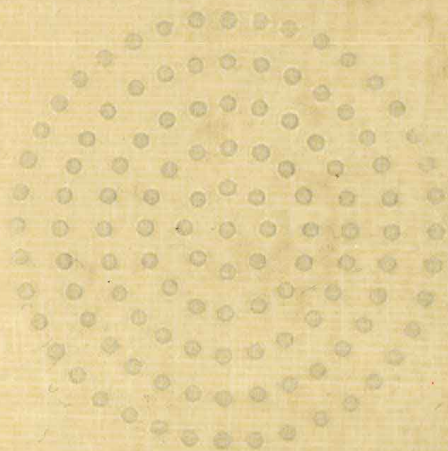
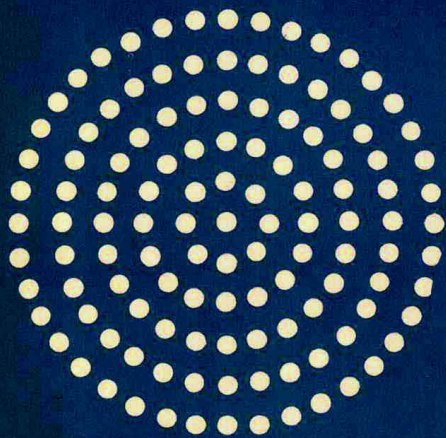




世界の詩集 10

ホイットマン詩集



長沼重隆訳

訳者 長沼重隆

1890年東京に生る。1908年単身渡米。1912年パー
クレー・ハイスクール卒。現在新潟県立女子短大
教授。主要著訳書 ジアコサ劇「落葉の如く」(金
星堂)。「トロローベルを語る」(東興社)。「ホイッ
トマン雑考」(自家版)。「ホイットマン詩選」(東
興社)。「草の葉・全訳」(三笠書房)。「愛する母
」(版社)。「草の葉抄」(角川文
詩抄」(白鳳社)。



世界の詩集

10

ホイットマン詩集

印刷 カラー 曉美術印刷株式会社

本 文旭印刷株式会社

函・鼎 曉美術印刷株式会社

製函 三真堂印刷紙器株式会社

製本 株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

昭和四十二年十二月十日 初版発行
昭和五十三年六月十日 七版発行

訳者 長沼重隆

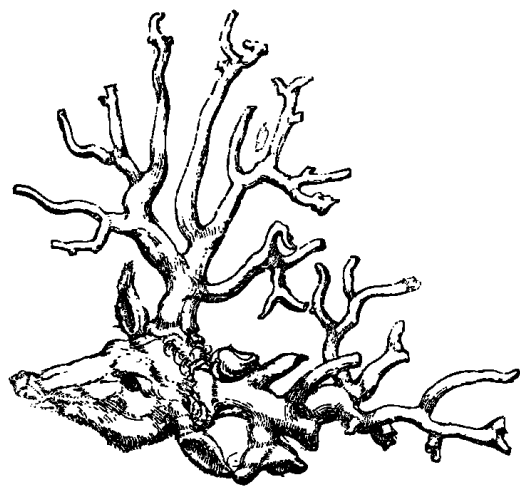
発行者 角川春樹

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三
●東京三一九五二〇八●三三
電話東京千(二)六七二三(大代表)

0398-590310-0946(3)

目次



人の自我を私は歌う

洋上の客船にて

ある歴史家に

この本を読んだとき

昔ながらの大義よ、御身に

毅然たる我れ

君の扉を閉じるな

私たち二人、私たちはどんなに永く隣さ

れていたことか

人も通わぬ小径に

無限の時代は間をおいて立ち還る

あなたのために、おお、デモクラシーよ

春に歌う

躁宴の都

あらゆる形而上学の基礎

博覧会の歌

いま、人生の真つ盛り

世界万歳！

大道の歌

ブルックリン渡船場を渡りて

私は夢みた

アメリカ杉の歌

セ

回転する地球の歌

一〇四

ハ

海路ゆく船を追うて

一〇五

一〇

開拓者よ！ おお、開拓者よ！

一〇六

二

ブロードウェーの行列

一〇七

三

果てなく揺れる揺籃から

一〇八

一四

生命の海とともに潮ひくとき

一〇九

一五

軍艦鳥に寄す

一一〇

六

海底の世界

一一一

六

ヨーロッパ

一一二

六

神々

一一三

二〇

灰色にはの暗い曉の陣營の一光景

一一四

三

追撃される隊伍の行軍と不案内な道

一一五

三

私は坐って眺めている

一一六

三

蹣跚とヴァジニアの森をさまよったとき

一一七

三六

き

一一八

三六

繯帶手

一一九

四

二人の勇士に捧ぐる挽歌

一二〇

四

彼らが蹂躪した荒廃の大地に

一二一

四

おお、「船長」！ わが「船長」よ！

一二二

六

夏雨の雨雲から降る雨のように

一二三

六

賤しい一娼婦に

一二四

六

十字架にかけられた「彼」に

一二五

出歩く一人の少年があつた
一弟子に与う

奇蹟

牛馴らし

大草原の夜

御身、上天に躍きわたる円体よ

不思議な喇叭手

天国の死の囁き

冬の日の機関車に

おお、魅力ある南部

ありふれたもの

マナハッタ

一切は真実である

解説

ホイットマン・人と作品

鑑賞

年譜

一四

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

より貴いもの

現代の世相

雨の声

つわものどもの屍

日没時の歌

あなたの門口にも死が

私の遺産

さらば！

「何処かへ行く」

永遠の航路に発てよ、幻の船

ベルシアびとの訓え

眼に見えるものは偉大である

三四

三六

三九

四〇

四一

四二

四三

四四

四五

四六

四七

四八

三四

三五

三六

ホイットマン詩集



人の自我を私は歌う

人の自我を私は歌う、一個の独立した人間を、しかもなお私は「民主的」という言葉、「大衆とともに」という言葉を口にする。

頭あたまの天辺てんぺんから足の爪先つまさきまで、人体の機構について私は歌う、

「詩神」にとって価値あるものは人相ひとさかばかりではない、また脳髓なんずいばかりでもない、

「人体じんたい」こそはるかに価値ありとするものだ、

「女性」をも「男性」と同等に私は歌う。

その情熱、その脈搏みやくはく、またその活力に、宏大無辺の「生命」について、

神聖なる法則のもとに打ち出された奔放不羈ほんぱふきの行動のゆえに、欣然きんぜんとして、

「近代人」を私は歌う。

洋上の客船にて

凄^{すさま}じく鳴る風、尊大^{とんだ}ぶった大波浪が轟^{とどろ}かす波の音楽をこめて、
涯^はてしなき藍碧^{らんぺき}が四方に拡がる

洋上の客船の上で、

あるいは喜ばしげに、自信たっぷり、その白い帆を張り展^{ひろ}げて、
船が白昼^{まひる}の耀^{かが}やきと、泡沫^{はうま}のさなかを、あるいは夜天^{やてん}の星の下を、エーテルを突き
切^きって進むところ、

この密^{こま}やかな海景のなかに浮ぶただ一艘^{こぶね}の小船の上で、
たまたま陸地^{りくち}の一つの思い出であるこの私は、老若^{ろうにやく}の水夫^{すいふ}たちによって、
最後に彼らと心打ち解^とけあい、親しく読まれることであろう。

「ここに私たちの思念^{おもひ}、海を渡る人々の思念が出ている。

ここでは陸地、がっちりした陸地のことだけが出ていない」と、その時彼らは言う
だろう。

「空はここにアーチ形に懸^かり、私たちは足下^{あしもと}にうねる甲板^{かんぱん}を感じ、
間^まのある脈搏^{みやくはく}、やむことなき運動^{うんどう}の満干^{まんかん}を感じる。

見えざる神秘の韻律、海水の世界の茫かつ漠たる暗示、液体の流るる節奏、
船の匂いと帆綱のかすかな軋み、その憂鬱な律呂、
果てしなき展望、遙かに朦朧たる水平線、すべてがここに出ている、
そして、これが、大洋の詩なのだ。」

おお、私の本よ、では怯まずに、お前の運命を果すがよい、
お前は陸地の回想ばかりではないのだ、

お前もまたエーテルを突き切って進む孤独な小船のように、その行先は知らないが、
しかも常に信念に充ちて、

帆走る船という船に連れ添って、帆走なのだ。

私の愛を包んで、彼らの処へ届けよ（愛する水夫たちよ、君たちのために、私はこ
こに詩の一つ一つに、私の愛を包んで置く）。

急げ、私の本よ！ 私の小さな船よ、不遜な激浪に逆って、お前のその白い帆を拡
げよ、

歌えよ、帆走れ、あらゆる海へと、無辺際むへんざいの蒼波そうはを越えて、

水夫たちと、すべての彼らの船へと、私から贈るこの歌を運んで行けよ。

ある歴史家に

過去を礼讃する君よ、

外観を、諸民族の表面だけを、外部に現われただけの生活を詮索し、

人間を政治的動物として、集団、支配者それに聖職者などを取りあげて論じてきた

君よ、

アレガニー山脈の住民である私は、その生得権によって、彼以外の何ものでもない

人間を論じ、

まれにそれを外面に現わす生命の脈搏をしかとつかみ（自分自身であることに、人

間の偉大なる誇りがある）、

「個性」の歌い手として、やがて来たるべきものの輪郭を描きながら、

私は未来の歴史を設計する。

この本を読んだとき

私がこの本を、この有名な伝記を読んだとき、

ではこれが、あの著者のいう一人の人の生涯なのであろうか。と（私はつぶやいた）、そして、私が死んでいなくなった後に、こんなふうになまた誰かが、私の伝記を書くことであろう。

（いかにも、誰かが、私の生涯を少しでも、ほんとに知っていたかのように、ところが、私自身ですら、自分のほんとの生活についてはまるで何も知らないところ、よく思っているのだ。

ただ、ほんの二、三の暗示、わずかな散らばった手掛りと、ほのめかしを、自分自身の用途のために探し求めて、ここに書き誌すにすぎない）。

昔ながらの大義よ、御身に

昔ながらの大義よ、御身に！

御身、比いなき、情熱に溢るる至善の大義よ、

御身、厳正にして、仮借なき、爽やかなる想念よ、

時代と、民族と、国土とを貫いて滅びず、

御身のために戦われた稀有の痛恨極まりない戦い、その大いなる戦いの後にも滅びざるものよ、

（古今のあらゆる戦争は、実に御身のために戦われたのであり、また、実に永遠に御身のために戦われるであろう、と私は思う）、

御身に捧げるこれらの詩篇こそ、御身の久遠の行進曲である。

（おお、兵士たちよ、戦いは戦いそれ自体のためだけではない、

さらに、さらに多くのものが、その背後に黙々として立って待ち、いま、この本のなかに進出せんとして来ているのだ）。

御身、数多き円体のなかの円体よ！

御身、騒然たる原則よ！ 御身、完全に保存され、潜在する胚種よ！ 御身、万有の核心よ！

因って来る動因の激越にして、熾烈なる一切の活動を傾け、御身の想念を取り巻いて、戦いは循環する、

（千年に三度も到来する巨大なる成果を伴って）、

御身に捧ぐるこれらの叙唱——私の本と戦いとは一体のものだ、

あたかも、勝敗が御身を蝶番いとするように、私と私のものは、その精神のなかに没入し、

あたかも、車輪がその軸を廻るように、私の本は自分では気づかずに、御身の想念の周囲を循環に循環する。

毅然たる我れ

「自然」のうちに悠々と立つ立つ毅然たる我れ、

一切のものの主人であり、また、一切のものの主婦であり、矛盾する万象のただなかに自若として、

彼らのごとく性格づけられ、彼らのごとく受動的で、感受性に富み、沈黙を守り、私の職業、貧困、虚名、弱点、罪惡などが、自分の思ったより、重要でないことを

発見し、

自らをメキシコの海に、あるいはマナハッタ、あるいはテネシーに、あるいは遠く北方に、あるいは孤島の上に、

河上の住民として、あるいは森林の、あるいはそれらの諸州のどこにもある農園生活の、あるいは海辺の、あるいは湖水の、あるいはカナダの人として見出す、

私はどこで自分の一生を暮そうと、おお、不慮の事変に心動せず、あの樹木や動物がするように、夜、嵐、飢餓、嘲笑、不慮の事件、排撃に向って真向から打つかるのだ。